「下村満子の生き方塾」ニュース Vol.11 2017.05

新会場で初の勉強会

「下村満子の生き方塾」は２月５日、東京・四谷の「スペース天夢」で、２月勉強会を開きました。東京での勉強会会場は、中原儀子先生の尽力で、高田馬場の「IZUNOME TOKYO」を使っていましたが、下村塾長の友人で応援団でもある湯川れい子さんの協力で、今回からこの「スペース天夢」を東京での勉強会の主会場にすることになりました。午前中は坐禅、塾生五訓唱和、稲盛和夫盛和塾長の代表作「生き方」の輪読会、午後からは「資本主義の未来と格差社会」のＤＶＤ上映、ＤＶＤを踏まえた下村塾長の講話、応援団であり、塾生でもある福島県郡山市と会津若松にあるザベリオ学園の理事長・学園長を務める守屋博子さんの応援団講義、小泉純一郎元総理が激白する「なぜ私は変わったか」のＤＶＤ上映など、今回の勉強会も盛沢山の内容でした。小泉元総理のＤＶＤ上映は、３月２日に郡山で行われた「生き方塾」主催の小泉元総理の特別講演会を実りあるものにするために行いました。勉強会には元アメリカンエクスプレス・シンガポール社長、アメリカンエクスプレス・ジャパンの社長で、応援団の中島好美さん、オブザーバーとして㈱「あつまる」社長の石井陽介さん（盛和塾福岡塾生）らが出席しました。　（文責　皆川 猛）

開会のあいさつをする下村塾長

塾生五訓を読み上げる小野塾生

輪読会

東京会場の四谷「天夢」

●自分を取り巻く環境は自分が作った

輪読会は、飯島充実塾生がリーダーとなって、「生き方」の第一章、「思いを実現させる」を読みながら、意見交換をしました。

第一節「求めたものだけが手に入るという人生の法則」は、朝倉祐子塾生が朗読し、朝倉さんは「身が焦げるほど、物事を考えないと達成できないことを実感している。例えばジャンボ宝くじ。一等当選を願って買っているが、思いがそこまで至っていないから当選していない」と、ユーモアたっぷり感想を披露し、会場を沸かせました。

第二節「寝ても覚めても強烈に思い続けることが大切」は、阿部洋子塾生が朗読。阿部さんは「どうせ自分は駄目なのだと思ったら、駄目な人生になってしまうという一文が、印象的だった。これを小さい時に学んでいれば、違った人生になっていたかもしれないが、悔いはない。今は保健師をやっており、『生きていてよかった』という感想を多くの人に持ってほしいと思う」と話し、これに対して下村塾長は「これからが人生の本番です。知ることが遅すぎたということは、絶対にありません」と応じました。

第三節「現実になる姿が『カラーで』見えているか」は、安斎隆子塾生が担当。安斎さんは「服飾デザイナーをしていた時のこと。注文してくれた方の顔やスタイルを見て、記事を選びデザインを考えていた。すると出来上がった服の姿が、極彩色の夢の中に現れる。その人に合った服がバッチリ決まった時の喜びは、稲盛さんが言う『手が切れる製品』が出来上がった時の喜びと同じ」と、強い思いの力を、体験を基に話しました。

飯島さんも「自分はモノづくりをしている。性能だけでなく美しさやきれいさを追究しているが、その商品に対する愛情の度合いは、必ず商品の出来に反映される。商品に完璧を求めないと、成功はしない」とフォローしました。

第四節「すみずみまでイメージできれば、実現できる」は、石塚和枝塾生が読みました。石塚さんは、がんの体験を基にして「病気の原因を考えればきりがない。そんなことより、元気になるというプラスの思いを持つように努め、マイナスの要素を捨てたことがいい結果を生み、元気になった」と、プラスのイメージが持つ力をアピールしました。

下村塾長は「私は石塚さんから『がんになりました』と告白された時、『絶対、大丈夫。心配いらないわ』と言いました。人は、自分は大丈夫と強く思っていれば、元気になれるのです」と、励ましました。

飯島さんも大病を患った経験から「病気を呼び込まないように、プラス思考で暮らしている。とにかく、しっかりと心に思いを刻み、ゴールをイメージできるまでシュミレーションする」と語りました。

第五節は「細心の計画と準備をなくして成功はありえない」を担当したのは、伊東優子塾生です。伊東さんは「子どもは大学受験が迫って来た時、『落ちたらどうしよう』と言ったのですが、私は母親の立場で『どうしたら落

ちないかを考えて努力しないさい』と言った。第一志望校に不合格だった時には『努力が足りなかった結果だが、これから４年間頑張れば、新たなものが見える』と、激励しました。結果がすべてだが、失敗によって将来をシミュレーションできるバネになった。目標を持たせて、達成度を点検する。これによって行動力、やる気が出るようにしている。これは中間管理職にも常々言っている」と、子育ての体験を披露しながら感想を語りました。

輪読会を進める飯島塾生

飯島さんは「自分は夢見る人で、行動はいつも楽観的。物事を成功させるには、稲盛さんが言うように、慎重かつ大胆でなければならない。慎重ばかりでは伸びない。慎重と大胆の組み合わせが大事だ」と指摘しました。

第六章「病気になって学ばされた心の大原則」は、大野一彦塾生が担当。大野さんは「自分は、出会いは必然なのだ、と聞かされてもピンとこなかったが、禅の接心を重ねたことによって、このことを実感した。自らと向き合ってみる、いやな上司と関わり合う不幸は自分の心が引き寄せたと思った。このことを知ってから、うまが合わない人との確執も軽く流せるようになり、人との付き合い方も分かってきた」と、心のあり方の大切さを強調しました。

第七節「運命は自分の心次第、という真理に気づく」は、小野浩喜塾生が読みました。小野さんは「『運命は自分の心次第』という稲盛さんの言葉は、経営者として本当にそうだと思う。新入社員を見ていると、これでいいのか、というタイプと一生懸命やっていく人がおり、考え方一つで人生が変わっていくことが分かる。経営者が覚悟を決めて経営に当っていれば、経営はいい方向へ変わっていく」と、稲盛さんの哲学の素晴らしさを語りました。

飯島さんも、この節が一番大事だとした上で、「心の持ち方を変えたら、人生の転機が訪れる。運命と宿命は違うから、いい方向に心を向ければ、いい結果が出る」と感想を述べました。

この日の輪読会をまとめる形で、下村塾長は「自分を取り巻く環境は、自分の心の反映であり、自分の心が引き寄せたもの。仏教的、禅的には、善いことをすれば善い結果が、悪いことをすれば悪い結果が出るという因果必然の法則です。ただし結果がすぐに出るとは限らない。長い時間がかかる場合もあり、一生のうちに出ないかもしれない。結果は来世に出るかもしれないし、前世での行いの結果が今、出ているのかもしれない。でも因果の法則は絶対です。仏教には　too late　という言葉はない。誤った人生なら、今日からやり直せばいいし、来世もある。

要するにネガティブな心は自然治癒力すなわち免疫力を弱める。逆にポジティブな強い思いはその人を努力させるから、成功させる。全ては因果必然で回っているのです」と、結びました。

塾長講話

●金融資本主義で格差拡大

今期「生き方塾」の通年テーマは、「資本主義の終焉と現代社会の変化」を追究することです。私は卒論の中で、いずれ社会主義経済は破たんすると書き、その通りになりましたが、今は資本主義もおかしくなっています。競争はいいのですが、行き過ぎた競争になり、モノを生産する産業資本主義から、利ざやを稼ぐことを主目的にした金融資本主義へと変質し、貧富の格差は大きくなる一方です。昨年秋に放映された「ＮＨＫスペシャル」は、「マネーワールド」という通しタイトルで、第一部では「資本主義の未来」、第二部では「超巨大企業と国家」を取り上げ、最終回となる今回は「格差社会」を扱っています。

資本主義のリーダーであるアメリカでは、トランプ氏が大統領になりました。彼はプア・ホワイトと呼ばれる白人の貧困層の味方を装い当選しましたが、彼を取り巻くスタッフは、超金持ちや保守派の軍人上がりで固められており、施策は富裕層優遇のものになるのは明らかです。そうすれば格差はさらに広がり、プア・ホワイトたちも、裏切られたとガックリするでしょう。今日は「巨大格差の果てに」と題されたＤＶＤを見てから、私の講話にしたいと思います。

資本主義危機について話す下村塾長

DVD上映

●富裕層トップ62人と下層36億人の資産が同額

冒頭、世界では世界の富裕層のトップ 62 人と、世界の最下層 36 億人との資産が同じだというデータを紹介。世界の総人口の半分に相当する 36 億人の平均資産は 1 人当たり 5 万円で、富裕層 62 人の平均資産は 1 人当たり 3 兆円だ。世界的な格差の変化を見ると、日本も少しずつ格差は拡大しているが、拡大が最も大きいのはアメリカだ。そのアメリカの実態は…。

アメリカの北部西海岸にある経済都市シアトルの一角に、テントシティと呼ばれる青いテントが密集している地帯がある。ホームレスが集まる公認の避難所です。住民は仕事があっても家賃が払えないらしい。

一方、五大湖近くのミネアポリスでは、1000 万ドル（11 億円）以上の資産を持つ「ビリオネア」と呼ばれる資産家たちのパーティーが開かれている。このうちの 1 人、スタン

リー・ハバード氏は、22億ドル(2500億円)の資産を持つ大富豪である。彼は地方向けの衛星システムを売りさばき、富を得た。「リスクはありました。失敗したら無一文だった」とハバート氏。努力して這い上がった彼は「たしかに格差は存在するが、それは貧しい人は努力を怠っているからだ。格差をなくすには、彼らにもチャンスを与えればいい」と厳しくコメントする。

ハバード氏のようなビリオネアは、政治献金を盛んに行っており、全米の政治献金総額の3分の1は富裕層からの献金というデータもある。ハバード氏は、レーガン大統領などに献金した共和党支持者だが、「見返りは求めていない。だけど、政治家は誰が献金したかを忘れはしない」と語る。ハバード氏は、今回(2016年秋)の大統領選への対応を協議するため、共和党支持の富裕層や政治家が集まる夕食会に出席した。

何が話されたのか。ハバート氏によると、「トランプ氏を支持しない。支持する理由がないからだ」。その代りに、共和党議員への支援を手厚くすることにした、という。「同じ思想を持つ人に献金するのは当たり前。彼らが防護壁になってくれる」からだと訳を説明する。この夕食会には、850億ドル(9兆円)の資産を持つコーク兄弟という大富豪も出席した。

しかし、このような富裕層の多額献金が、政策の偏りを生み出す、とする意見もある。経済学者のマーティン・ギレンス氏によると、1800件の政策のうち、 約半分の45%は富裕層が主張する政策、と指摘する。政治資金の大半が一握りの富裕層からの献金だから、低所得層たちの主張が反映されない、と話す。

実際、テネシー州では、指摘されるような事態が起きている。ここは貧困率が高い地域で、公的医療保険に貧困のため加入できない人がいる。この保険加入を促す法案が州議会で審議され、成立目前までにこぎつけたが、先の夕食会に出ていたコーク兄弟が支援する団体の反対により、廃案になった。団体の言い分は、「この法案は財政負担が大き過ぎ、採算が取れないことは、計算すれば分かるはずだ」。

しかし、大病を患いながら入院できない人は、「私は薬を飲むか、食べ物を買うかを選ばなくてはいけないのです。お金で選ぶ政治は止めさせなくてはいけない」と怒りを露わにする。

●トリクルダウン理論のウソ

「格差は仕方ない」という意見を持つ学者がいる。その1人であるリチャード・エプステイン氏は「富裕層がお金を稼げば、その恩恵は、少ないながらも貧困層にも行きわたる。一部の優秀な人が活躍すれば、格差は広がるかもしれないが、その方が社会全体は繁栄し、貧困層の生活も押し上げてくれる」と発言する。

井手英策慶応大教授は「現在は富裕層と貧困層の二極化が猛スピードで進行しており、お互いのことを批判し合うばかりで、分かり合えない状態になりつつある」とコメント。日本の公的保険システムは優秀と言われているが、教授は「日本にも格差は広がりつつある。片親家庭の貧困率は50.8%であり、これは先進国の中では最悪だ」と説明する。

また、「格差は仕方ない」という話を、シャンパングラスをピラミッド状に積んだグラスタワーで解説する。頂点のグラスにシャンパンを注ぐと、下のグラスにどんどん中身が流れていく。上部のグラスが富裕層で、底辺のグラスが貧困層で、注がれるシャンパンを富に例えれば、上から注がれるシャンパン(富)はまず、富裕層のグラスを満たしてから、こぼれ出て、下部のグラスは上部のグラスよりも入れられる量は少ないが、確実にグラスを満たしていく。これは 学問的には「トリプルダウン理論」という。しかし、実際には、最近は格差が広がっているから、このグラスタワー理論には大きな疑問符が付く。

グラスタワー理論は、グラスが皆同じ大きさという前提が必要だが、最近は頂点のグラスが非常に大きい。だから、頂点のグラスにいくらシャンパンを注いでも、このビッグサイズのグラスが溜め込んでしまうため、シャンパンは下のグラスに流れない。人間は金持ちになればなるほど、欲望が出てきて、しかも経済は低成長だから、注がれるシャンパンも少ない、と井手教授。

そもそも、格差はなぜ生み出されたのだろうか? 資本主義が生まれてから、格差は大小を繰り返してきた。基本的には、企業が利益を出せば賃金として労働者に還元され、利益を出す企業に税金をかけ、これを社会サービスにして富の再分配を行っている。賃金格差は競争心を生み、成長を促すいい面もあるが、行き過ぎた格差社会のアンチテーゼとして、社会主義が生まれる。社会主義は、格差をなくし、競争のない社会を原点としている。

トリクルダウン理論のまやかしを暴く

そこで資本主義は、社会主義への対抗上、富裕層へ重税し、福祉を充実させ、格差是正を行ってきた。しかし1970年代になり低成長となると、規制緩和や法人税の減税などで、経済活動を促す動きが出てきた。一方では、ソ連の崩壊などで社会主義勢力も弱まった。このため1980年代からは、格差が拡大し始め、 2000年代に入ってからは、ますます格差拡大が進行している。つまり、社会主義というタガが外れてしまったことが格差拡大の要因なのだ。

かと言って、社会主義が復活すれば、現状を解決するわけでもないし、企業側も、儲かっても賃金を増やせない事情がある。例えば、IT化により人件費を抑制できるし、グローバル化により安いモノが入ってくるようになり、値段を下げざるを得ない。「資本主義のスピードに、人と制度がついていけてない」ということだろう。

●分断生む格差社会

格差は世界の分断を生み出す、と警告する知識人もいる。クリントン政権時の労働長官だったロバート・ライシュ氏は「今の格差は、プラスの影響をはるかに超えている」とした上で、「たしかに格差は懸命に働く人を増やし、イノベーションを生み出す。行き過ぎると負の効果を生む。今はそんな時代になりつつある」と警鐘を鳴らす。さらに彼は「いずれ、富

裕層が特権貴族のような振る舞いをし、貧困層は努力しても報われず、無力感を感じる時代がくるのでは」と懸念する。

世界一貧しい大統領といわれたウルグアイのホセ・ムヒカ前大統領は「格差は、人々の政治不信や、世の中への不安を生み出し、排他的なポピュリズムや国粋主義者を量産する。これは世界に不幸をもたらす」と警告しています。

これらの懸念や警告は、日本にも当てはまる。富裕層と貧困層、正規雇用者と非正規雇用者、男性と女性といったように、いろんな尺度で社会が分断されてしまう恐れがあり、相手を批判したり、相手の取り分を削ればいい、などの排他的な考え方が主流になってしまう。日本を含めて世界は「不寛容」な社会になっている。

格差を減らそうという考え方は、富裕層の中からも出ている。資産運用会社の元常務役員のいわゆる富裕層モリス・パール氏は「このままでは世界が悪くなる」と格差の是正に動いている。彼のように、政治を動かそうとする富裕層を、「パトリオティック(国を愛する)ミリオネアーズ」と呼ぶそうだ。彼が目指すのは富裕層に増税し、最低賃金を引き上げ、今の貧困層を中間層に入れることにある。そうすればサービスやモノを買える人が増えるので、富裕層にとってもメリットがあるはず、と予測する。彼は、民主党の要人と累進課税について話し合った時、「格差の是正は待ったなしだ。一握りの富裕層が過剰な利益を得ているのは、看過できない」と強調した。

店でのクレジット決済サービスを提供するグラビティ・ペイメンツ社の社長は、①幹部の給料を下げ②社員の最低賃金を7万ドル（770万円）に引き上げることにした。これにより、社員の仕事への意欲が上がる、社員の責任感も増し、会社への愛着も強まり、結果的に会社の業績もアップし、社員の結婚や出産なども増え、ベビー用品などの消費が増えた、と社のCEO（最高経営責任者）。CEOは「この動きが広がれば社会全体が潤う。これからの資本主義は新しい発想で前に進むべきだ」と話す。

しかしすべての富裕層がそういうわけではなく、このCEOは、兄から「不当に給料を下げられた」と訴えられているし、納得いかないとして幹部2人も退職している

この例は、一人の利益を追求するだけのことをしていたら、社会が成り立たない、（自分が利益を上げたら余計に）みんなの利益も考えてあげないと社会が成り立たない、という実例を示している。

経済学の先駆者として位置づけられているイギリスのアダム・スミスは「利益を生むのは利己心だけでなく、『共感』の心」だと言っている。彼が言う共感とは、相手の不利益になることにも思いをはせて自分の行動を決める、ということだ。

ウルグアイのムヒカ前大統領は「あなたの人生を市場経済にゆだねてはいけない。あなたはお金ではなく、お金を稼ぐための時間でモノを買っている。 かけがえのない人生を大切にしてください」と若者に向けて、早稲田大学で講演している。

●シェアビジネスが台頭

これから資本主義はどうなるのか。文明評論家のジェレミー・リフキン氏は「資本経済のほか、『共有型経済』も台頭する」と未来を予想する。共有型経済とは、モノやサービスを買うのではなく、分かち合う社会であり、実際、オランダでは日用品の貸し出しサービスが盛んに行われている。ここでは、ご飯のおすそ分けもしており、リフキン氏は「世界的にもシェア・ビジネスは台頭しつつある。ただしこれはGDPには入らないが」とも述べている。

冒頭に登場した大富豪ハバード氏は、休日、大きなヨットに乗って過ごす。彼は「資本主義は努力のしがいがある社会。みんなに平等の機会を与えられるいい社会だ」と考えているが、小さなヨットを見て、「私より小さいヨットに乗っている人も楽しそうだ。もしかして、私よりも楽しいかも」とつぶやいた。

塾長講話

●正念場の資本主義

3回にわたりＤＶＤを見ましたが、現代資本主義が抱えている様々な問題がよく分かったことと思います。私はバブルが崩壊した20年前から、資本主義は変質したと訴えてきました。この変質を楽観的に捉えるか、悲観的に捉えるかで、これからの生き方も大きく変わると思います。

日経に今、「Ｂ級企業」が面白いビジネスをやり始めたという記事が載っていました。ＮＰＯ法人がやるような奉仕ビジネスに似ているけれども、きちんと利益を上げているというわけです。ソーシャリー・リスポンシブル、社会に貢献する企業活動というのでしょうか。こういったＢ級企業が全世界、特に若い世代で広まっているということです。確かに、格差社会が拡大する一方では、その反作用として、シェアリング経済、物々交換みたいな、人と人が密着しながら展開する新たなビジネス・モデルが登場しています。小回りが利く、「大きいことはいいことだ」という発想とは真逆の、身の丈に合った経済活動です。新しいタクシー・ビジネスのウーバーもそうでしょうし、空いている部屋を貸すエア・ビー・アンド・ビーも定着してきました。

今回のＤＶＤでは、スペインの小さな村で行われている原始共産制のような生活スタイルが紹介されていますね。衣食住の生活必需品は、利益抜きで提供し、余剰生産物は村外に、利益を考えた値段で売り出してその利益はみんなで共有する生活スタイルです。競争原理を排したこのスタイルが人気を呼んで、移住者が増えているそうです。共産主義の全て一律でもなく資本主義の弱肉強食でもない社会がこの村にはあります。

グローバル化や格差が拡大する中で、小さな地域社会を目指す試みが成功している。今、まさに人類にとって、資本主義は正念場を迎えているのです。それでは、塾生から意見をもらいたいと思います。

【小野浩喜塾生】

何のために仕事をしているのか。アメリカの若い経営者は自分の報酬を10分の1に引き下げ、社員に還元しました。これによって業績が上がり、社員にやる気を起こすことができました。これをできた彼は幸せだと思いました。

【山本亮二郎塾生】

大変勉強になりました。私はベンチャー企業への融資ファンドをやっています。私の原点は貧しさにあるので、中途

半端でない富豪を目指していますが、富は社会に還元するなど有効に使いたいと思っています。

【下村塾長】
今日は応援団の中島好美さんがいらしています。彼女はアメリカン・エクスプレスというクレジット会社の副社長、アジアの金融センターであるシンガポールの社長、そして最後はアメリカン・エクスプレス･ジャパンの社長などを歴任し、昨年末退職しました。とてつもない富裕層の実態を知っている方なので、是非話を聞きたい。

【中島好美応援団】
たしかに超大金持ちと言われる富裕層とも付き合いました。欧米の富裕層には二つのタイプがあり、一つは利益を社会に還元しようとするタイプで、もう一つは家族ために使おうというタイプです。一方日本は、抱え込む人が多いのが特徴です。また華僑は、一族のために、万一に備えて資産を海外に移し、いざという場合には一族郎党は資産の移動先に移住します。アメリカの場合、カリフォルニアなど西海岸の資産家は、リベラルが多いため、財団を設立して寄付という形で社会還元をし、東海岸の資産家は宗教に使うケースが多いようです。彼らの基本的な考え方は、カネは才能に対する評価であり、カネは自分のために有効に使うというものです。秩序ある競争は国を豊かにしますが、社会がおかしな方向に向かっているのは、資産家、富裕層の考え方がおかしい。だから、彼らにこそ勉強してほしい。

【石井陽介（オブザーバー）】
私は会社経営をしていますが、DVD で見たアメリカの彼のように、役員報酬を引き下げて社員に還元する。こういったことが自分でできるか、とても想像できません。

【阿部利彦塾生】
社員の年収を引き上げることは間違っていないと思うのですが、会社の利益がどうなるのか、見通し出来ない限りは難しい。しかし、社員の物心両面の幸せを図ることは、とても大事なことだと思います。

【下村塾長】意見、感想ありがとうございます。私の経験を話します。両親がやっていた医療法人を引き継いだ時、この法人は赤字経営でした。父が亡くなった後、母が理事長を務めていたのですが、母は医者でしたから、経営は全くの素人で、事務局長に任せきりでした。引き継いだ時、私はこのままでは、この法人は潰れてしまうと感じました。何せ赤字を垂れ流したままで、一向に改善策を講じていません。

そこで私は、全職員を集めてこう言いました。「今の経営状態は、出血多量の病人にみたいなもので、放置しておけば、死んでしまう。絆創膏を貼って応急処置しても、一時しのぎに過ぎません。すべきことは傷口をきちんと処置することです。パイが小さくなったのだから、それを食べる人の数を減らすか、一人が食べる量を減らすしかない。もちろんパイを大きくする努力も必要だし、黒字になったら給料は元に戻します」。リストラするか、給料削減かを職員に聞いたのです。するとみんなはリストラではなく給料削減を選びました。実は、私もリストラをするつもりはありませんでした。また、給与カットでなく、ボーナスカットでした。

理事長の私は、全ての支払伝票に目を通し、おかしいと感じたものについては当事者を呼んで説明を求めました。伝票チェックをして感じたことは、無駄な支出が多く、これでは赤字になるのは当然だと思いました。職員に節約を訴え、伝票チェックを徹底すると、支出は激減し、わずか１年で黒字転換になったのです。賞与は皆に返しました。職員の士気も上がりました。理事長が支出に目を光らせていると分かると、職員も無駄な経費を抑制するものです。経営者と従業員が目標を共有し、利益も共有して配分すれば、みんなが幸せになれるのです。

●目に見えない価値こそが大切

先程のＤＶＤで紹介されたアメリカ富豪は、努力した結果、巨万の富を得たと話していますが、彼一人の努力だけで成功したわけではありません。彼を支えてきた社員が大勢おり、貧乏人は努力していないわけではありません。彼はこのことを忘れています。

今の社会は機会均等や、成功へ導く情報へのアクセスが均等でないから格差が生まれている場合が多いのです。これらのインフラの格差を埋めるのが政府の役割なのですが、税制は金持ちに有利になっているから、格差を埋めるための財源が不足しています。つまり富裕層と貧困層とでは、そもそもスタートラインが違います。かつては富の再配分のために、富裕層には累進課税を課していましたが、今は富裕層への税率が大幅に引き下げられ、富裕層が喜ぶ社会になっています。１票を投じる場合は、こうした課税制度も考えて欲しいのです。

トランプ大統領が当選できたのは、情報に触れる機会が少ないプア・ホワイトに対して、シンプルな例を出して煽ったからです。冷静に考えれば、トランプの主張のように輸入品に高関税をかけたら、アメリカ国内は物価高になって、プア・ホワイトは生活苦になることは必至です。トランプの主張の７割は嘘や出鱈目なのに、プア・ホワイトたちは、学歴も低く、情報分析もできないので、分からない。テロの脅威をなくさなければ、とトランプは力説しますが、ＩＳをつくったのは、ブッシュ政権下で行った中東戦争であり、国際的な貧富の差が背景にあります。つまり国際的な格差がある限り、宗教の名の下に格差をなくす戦いが続くのです。

熱心に耳を傾ける塾生

人生は人によって違うし、その価値観もまた違いますから、一律平等というのもおかしい。しかし、俺一人が努力した結果だと豪語する大金持ちも、またおかしい。人件費削減のために使われている非正規雇用の人たちは、明日はどうなるか分からない不安に苦しんでいます。

京セラは 1970 年代のオイルショックの際、仕事は 70％激減しましたが、それでも稲盛さんは社員をリストラしませんでした。稲盛さんは言います。「有能なヤツほど辞め、無能な社員は行く所がないので辞めなかった。でもその辞めなかった無能な社員は恩義に感じて、その後頑張り、会社を盛り立てていった。そういう意味でも、アメリカ流の能力主義だけの経営はおかしい」と。

今世界で起きていることは、常識が非常識になり、非常識が常識になりつつあるということです。その端的な例がトランプの当選です。アメリカ国民は、トランプに、

無意識かもしれませんが、既成層に対する「壊し屋」を期待したのだと私は思っています。しかし、トランプ流のポピュリズム、不満な大衆に迎合する政治をしていたら、各国との利害が衝突し、戦争になってしまいます。
私が言うように、今は文明の大転換期に差し掛かっています。こうした 21 世紀だからこそ、新たな対応をしない限り人類は破滅してしまいます。
21 世紀とは数字やお金で語られる時代ではありません。20 世紀には邪魔、と切り捨てられてきた「目に見えない価値」が尊ばれる時代になるのだと思っています。大きなクルーザーに乗って週末を過ごすアメリカの富豪が、小さなヨットで遊ぶ人々を見て、しみじみと語った「私より小さいヨットに乗っている人も楽しそうだ。もしかして、私よりも楽しいかも」という言葉は、実に示唆に富んでいると思います。私の講話はこれで終わります。

履歴書の空白埋めたい　守屋さん渾身の講演

守屋さんは、「私学復活をかけた変革の試み―会津若松ザベリオ学園中学・高等学校の挑戦」と題して講演しました。講演要旨は以下の通りです。

55 歳の時、ステージⅢの乳がんが見つかり、10 年間は生きられるが、必ず転移するので再発する。仕事ができる保証はないと、宣告されました。この言葉を聞いて、大きなショックを受けました。でも逆に、この宣告を感謝しよう。この 10 年間をどう生きるか、神様から与えられた時間、生かされた時間なのです。そこで 3 年ごとに、どう生きるのかプランを立てました。こうして 21 年間、毎日日記の終わりに「今日 1 日、皆さんに感謝」と書き続けています。
前向きに考えられるようになったのは、「置かれた場所で咲きなさい」の著者である渡辺和子さんのおかげです。彼女は昨年 12 月 30 日、膵臓がんで天に召されましたが、いつも「神様が天に戻る時を決めるのだから、ジタバタするな。頑張りなさい」と、抗がん剤の副作用で苦しんでいる私を励ましてくれました。3 年ごとのプランも彼女のアドバイスです。「天国に行く時、神様が手にするあなたの履歴書が空白だらけでは恥ずかしいでしょう。やりたいことは何か、どうやるかを考えながら、与えられた時間を使いなさい」と言ったのです。
私は岡山県のノートルダム清心女子大英文科に入りました。この大学に入学したのは、無料で留学できると聞いたからですが、大学 3 年生の時に、結核に罹ってしまい、留学はできなくなりました。当時は、結核に罹ると結婚はできない、子どもは産めない、と言われていましたから、その時から私はどういう人生を送ればいいのか、と考えてきました。
話は戻ります。私の乳がんを見つけた医師も前向きな人でしたから「がん治療は日進月歩しているから、10 年後には現時点での予想とは違っているだろう。だから 80 歳になった時、老衰で天助を全うするかもしれない」と言われました。10 年間と言われた人生に大きなおまけが付いたので、これからどうお返しするかを考えました。がんを認め、がんに感謝する。空白の履歴書を埋めるための恩返し。そんな時に舞い込んだのが、ザベリオ学園の経営立て直しでした。

渾身の講義をする守屋先生

全国には 230 のミッションスクールが、修道士や修道女が高齢になってしまい、半数の学校の理事長は民間人が務めています。ザベリオ学園は、カナダのモントリオールに本部があるカトリックの無原罪聖母宣教女会が、遅れていた日本の学校教育を改善するため設立し、創立 85 周年を迎えています。このザベリオ学園ですが、学園長が老齢のために退任することになり、新たな学園長を求めていました。私は大学を卒業した後、一般の留学や語学留学を請け負う「株式会社アイ・エス・アイ」の設立に参画して、副社長などもやり、学校経営のコンサルタントも行っていました。2009 年のころでしょうか。
そんな私に「誰か適任の学園長を見つけて欲しい」という依頼がありました。いろいろな人と接触したのですが、適任者は見つかりませんでした。やむなく 2010 年、副学園長に就き、おまけの人生の恩返しのつもりで、東日本大震災があった 2011 年に学園長を引き受けました。

●これまでの仕事に捉われない

会津若松の人口は 12 万人と、福島、郡山、いわきの人口と比べると半分か三分の一しかありません。高齢化が深刻ですから、子どもの人口は極めて少数です。ですから会津のザベリオは、ずーっと赤字でしたが、人口が多い郡山にもザベリオ学園があるから、学校法人としてのザベリオは、どうにかわずかな黒字でした。しかし、その時点で少子化は始まっていましたから、法人の赤字転落は時間の問題でした。
2015 年の会津若松の通学圏内の中三生は 2700 人で、若松市内の中三生は 1350 人しかいません。私学には創立の理念があり、先生たちはその理念に沿って、いい教育をしていればいい、公立の学校と同じ教育をしていればいい、そうすれば補助金も出るから何とかなる、とぬるま湯的な発想にありました。
学校の先生は外の空気が分かりません。赤字転落を避け、黒字を増やすには、生徒を増やすしかありません。そのためには学校を魅力あるもの、通いたくなるような学校するしかありません。
先程のＤＶＤにもあったように、15 歳の高一生が 30 歳になるころの社会はどうなっているのか、今の時点では全く想像できません。文科省が国際化を見越した教育をしなさい、と力んだところで、公立はそう簡単に動きません。その点、私学は独自性を発揮できます。
私はまず、公立ではできない独自色を持った教育をしようと考えました。一番は社会のニーズに応じた教育です。言い

換えれば、地域の親の期待値に応える、私学ならではの独自性を発揮することでした。学園長を引き受けた時の状況はこんなものでした。私は「あと何年生きられるか」という時限爆弾を抱えていますから、天に持っていく履歴書に早く書き込まなくてはという、切羽詰まった思いがありました。

何からやろうと考えました。会津という地域を考えると、ここは穏やかで基本的なモラルがしっかり根付いています。これを伸ばす一方、日本人に欠けている、広い意味での自己表現をする力を生徒に身につけさせなくてはと考えました。実は、大学を卒業した後、1970年に開催された大阪万博準備の仕事を、2年間ほどアルバイトでしていたのですが、その時日本人のコミュニケーション能力の低さを痛感しました。自分の考え、思い、意思を伝えられないのです。だから相手の意志も分かりません。これは全くひどいことです。

この体験があったので、コミュニケーション・スキルを重点課題にしました。学園長に就いた2011年3月には、あの大震災がありましたね。どうしてこんなことになるの、とため息が出ましたが、前に進むしかありません。そこで、職員には「新生ザベリオ」として、これまでの仕事に捉われずにやっていく、と意思を表明しました。先生方にはこれまでやってきたことを箇条書きにしてもらい、その中から公立学校ができるものは消していけと、指示しました。そうしたらすべて消され、何も残りませんでした。「これでは何も、ザベリオがここにある必要性はないじゃないの」と言いました。

もう「待ったなし」です。単体では赤字でしたが、生徒数が少なく先生の数も少ないから、かろうじて職員のリストラはしないで済みました。黒字にするにはどうするか。ザベリオを受けようかという志願者を増やすことです。受験料収入はバカにできません。学校の宿命ですが、新しいことをやろうとすると、5年かかります。計画して検討して吟味していろいろ練って…とダラダラ時間をかけます。しかし5年後には社会は全く変わっています。そこで私は「1年でできることは何だ」と問い掛けたのです。

●思いつくことは全てやった

ザベリオは84年前に、まず幼稚園を作り、その園児たちが卒園する時小学校ができた、中学校ができた。中学までは共学だったのです。ところが高校をつくる時、修道女たちは、男の子たちは教えられないと、高校創立の際、女子高にしてしまいました。初めの頃は、ザベリオは「会津の学習院」と呼ばれていたようです。お嬢様たちは上智大や聖心女子大に進み、やがてお嫁に行きました。そんな時代でした。でも少子化の今、子どもがいないのだから女の子だけで高校を続けるならば、閉校するしかない、と先生方に告げました。

新生ザベリオとして復活するには、何に価値があるのか、ザベリオの価値とは何なのか、価値を生むにはどうすればいいのか、公立を上回る価値は何なのか、を考えて欲しいと訴えました。価値を生むだけでは終わりません。結果を出さなければいけません。職業や生き方が自由な時代なのだから、教育の結果が出るシステム作りをしようと考えました。

でも全員の先生から「学園長は東京の人だから分からないでしょうが、東京と会津は違いますよ」と言われました。すっかり固定観念に縛られているのです。そこで私と新しい校長で、会津の全ての小中学校の校長を訪ね、「どうすれば生徒をザベリオに回してくれるのか、教えてください」と頭を下げました。すると校長たちは皆、驚きました。校長たちは、ザベリオ高校は情報公開がほとんどないグレイゾーンだ、と言いました。こうしたことと同時に、卒業生、保護者、地元の中学校から、要望を徹底的に聞きました。すると、要望はどっさりでした。

やはり多かったのは、情報公開がない、という指摘でした。進学実績も分からないし、志願者数、入学者数も、学校行事も分からない。そして受験の仕方ですが、それまではザベリオ高校を受験する生徒は、ザベリオだけしか受けないという専願方法でした。県立高校との併願を認めていませんでした。会津高校に失敗したらザベリオが拾ってくれる。こういったシステムがありませんでしたので、これをまず改めました。

これで志願者は2倍になりました。さらに、推薦入試と一般入試の前期、後期の3本立てにしました。これで受験者が5倍になりました。1年目から受験者が200人から1000人になりました。東京の私立高校受験料は3万円で、ザベリオは1万円ですが、それでも受験者の大幅増加は大歓迎です。

次に、ザベリオに行ったらどんな大学に進めるのですか、という疑問にも応えねばなりません。そこで進学先を開拓しました。先生方を東京に送って、ザベリオの生徒を推薦入試させる大学発掘キャンペーンを行いました。どういう成績を取ったら推薦入試をしてくれますか、と聞きに行かせました。つまり、入り口と出口を整備したわけです。

全会津の中三生は3000人で、県立高校は19校あり、私立は看護専門学校を含めて3校。こうした中で、ザベリオが本当に必要なのか、廃校にするのか、発展させるのか、の二者択一しかない、と先生方に言いました。更に経理を全て公開し、いかに厳しい環境にあるかを示しました。

ザベリオの先生方は皆、素直な方たちばかりです。バランスシートを見て、一様に「こんなに赤字だったのですか」と驚き、何とかしなければいけないと行動に移してくれました。受験者を増やす。中学校長から、情報公開をしていないという批判があったので、学校に戻った後、校長と二人で1週間かけ、公開してほしいと注文された情報を全てまとめ公開しました。この熱意に小中学校の校長たちは感動してくれました。校長たちは、今度の学園長と校長は本当にやる気があるようだ、と評価してくれました。全ての中学校で入試説明会を開けるようになり、数校ではありますが、小学校でザベリオ中学の説明会を開きました。全会津の小中学校に学校案内のリーフレットも配りました。保護者への説明会など、思いつくことはすべてやったと思います。

学校行事の情報や生徒の活動情報も報道機関に提供しました。会津地方は余り新聞ネタがないので、提供した情報はすぐに記事にしてくれます。これでザベリオとはどんな学校なのか、知名度は高まっていきました。東京ではこんなことは絶対ありません。何百万円もの広告に匹敵します。

学力テストの結果で分かるように、会津地方の学力レベルは低いです。これを底上げするにはどうすればいいのか。ザベリオの地域奉仕として、希望する小学5、6年生を対象に無料で学力テストをして、力を診断すれば、保護者や児童

から喜ばれると考え、実施することになりました。先生方は、「ザベリオが学力テストをして何人受けるのか」と鼻であしらっていましたが、私は「たとえ受験者が少なくても、やっていることが分かればいい」と言って、平成23年に初めて実行しました。すると200人が受けました。子どもの数は減っているのに、受験者はうなぎのぼりに増えています。

●企業的発想を取り入れる

私のキャッチフレーズは「15歳の春を泣かせない」です。ザベリオを受ければ全員合格できる、です。5年前、県立と併願する受験生向けには、入学金を3万円にしました。この額は、受験生の祖父母が孫の高校入学に準備しているお金の平均額だからです。志願者が増えているので、今年からは併願者入学金を5万円にしました。でもこれがアッパーリミットでしょう。

先生方には、学校は生徒のためにある、という気持ちを忘れるなと言い続けています。「うちの生徒は、会津高を落ちたやつばかり」というような生徒の悪口を言わないことも鉄則です。生徒をバカと言う教師は、あなたこそバカなのですと言います。会津高に負けないために、先生方にも勉強してもらっています。高校の実績が上向くと、ザベリオ中学の生徒も、確実かつ大幅に増えてきました。高校共学化も生徒増に結び付きました。志願者が増えれば生徒の学力レベルも上がります。特進コースという有名大進学コースは、会津高と同程度の進学実績になっています。これまた新聞記事です。ザベリオの特色は、将来の自分の針路に応じた多様なコース設定をしている点です。学力や希望に応じて勉強するわけです。

平成26年、県立高校は12校16学科で343人の定員割れとなりました。生徒不足が深刻なのです。こうした厳しい環境の中で、価値ある教育とは何でしょうか。私は英語学習、異文化コミュニケーションであり、個々の能力、学習レベルに応じた教育だと思います。

●あと1年ください

同時に先生方にも勉強してもらうようにしました。ある先生にセンターテストを受けてもらったところ、いい点を取れません。15年前と今とではテスト内容は変わっています。そこで、センターテストに出る教科、科目の先生は、夏休みに、過去5年間のテスト問題を解き、90%以上の得点をできるように勉強を義務付けました。冬休みは早慶や中央といった難関私大の入試問題解答をやらせています。この姿を見て、子どもたちは絶賛します。こうした積み重ねがあって、平成24年度の国公立大合格者は1人でしたが、28年度は30人になる見通しです。

合格者が出れば、その子を、私はじめ学校を挙げて祝う。

テストの結果は保護者を呼んで伝えますが、公立中学校のためにはこういう勉強をさせればいいです、などのアドバイスをしています。大好評です。こうした種まきが3年後の高校入試の受験者増に結び付きます。受験料は10000円ですから、増えた受験料収入のごく一部を、先生方にボーナスとして贈っています。

先日下村先生におこしいただいて、生徒たちに「生き方塾」の出前講座をしていただき、個性の尊さを強調なさいましたが、個々の個性に応じた教育がぴったりするのは、ザベリオしかないと思っています。現実に寄り添いながら能力を高める。一人ひとりに合った針路を考える。これを徹底して先生方にやらせ、今は英検を必須にし、99%が受けています。

もう一つは、結果を出さないとお金を払っていただけないということ。そのためにはどうするか。ザベリオは1年間1000時間の家庭学習を行っています。3年間で3000時間です。一人ひとりが学習プランを立て、毎週一回先生がプランに沿った勉強が行われているかどうか個別指導します。いわば塾のようなもので、これによって生徒の学力はぐんと伸びました。先生の数も、平成22年の27人から、今は43人に増やしました。生徒は2倍以上になりましたから。その先生方をトレーニングしなければなりませんが、それは校長の役目です。私は教育者ではありませんから。校長先生にお任せしますから、自由にやってくださいと言ったら、校長先生は、授業力を付けてもらわなければ、という見解を示しました。そのためには作問力を付けなければならない、分析会を開いて授業の展開を研究する必要がある、評価も必要だ、となりまして、実績のある先生にはプラスの評価をして、ボーナスに上乗せして差し上げています。なぜこのような評価になったのかの理由も付けて、先生全員に公開しています。これは企業的な発想です。

その時の高揚感ががんに効くのでしょう。元気になります。呼吸困難を忘れます。本当に、生かされていると感じますね。やってごらん、やればできる、あなたはすごい。この言葉のように、偏差値も上昇し、会津高校とほぼ互角になりました。ザベリオの地位は今や揺るぎないものになりつつあります。

4月からは、「learning」から「thinking」を柱にした21世紀型の教育を模索しています。

どうか、神様。あと1年下さい。この成果を書き込んだ履歴書を持って天国に行きたいです。

●塾生感想　日々真剣に生きる守屋先生

○…心の様相が物事を引き寄せることは本当だ、と感じています。思ったことは口について出るし、その言葉は脳も記憶し、他人もそのように聞くわけですから、物事は自分が思ったように動いていくのだろうと考えています。善い思いを持ち続けるためには、自らのエネルギーを信じることだと確信しました。

○…貧富の差は拡大するばかりで、これは貧困層が生活を立て直すチャンスが断たれているからだと思うのです。「努力が足りない」では解決しません。果てしない人間の欲望がどこまで行くのか怖い。豊かさとは何なのか、をもう一度考える時なのでは。

○…思いを実現させるには心の持ち方を変え、願い続ける。これは家庭、仕事、病気になった時など、あらゆる場面で当てはまることです。ただ思い続けるだけでは前に進むことはできません。この思いを従業員にどのように広げていくのかが、最大の課題です。時には足を引っ張るようなことを考えている人もいます。それでも強く思い続け、目の前のことをひたすらやることの積み重ねが、やがて実を結ぶ。でも時間がかかることなので、年をとってしまったら、と考えると、少し寂しい。守屋先生の話に感動しました。強く生きているし、日々真剣に生きていると思いました。

○…稲盛さんが会社経営する上で、思いを実現するには「狂」が付くほどまでに強く思うことから始まると言っています。守屋さんは、残された時間から生きて動ける時間を算出して自己実現の計画を立て、それに沿って行動しています。塾長は生きている限り完全燃焼という生き方を実現しています。三者とも表現こそ違いますが、言っている中身は同じであることに気づきました。

○…小泉純一郎元総理の「なぜ私は変わったか」を見て、原発ゼロを推進するべきだとあらためて思いました。福島県民として非常に興味深く感じました。

○…輪読会と守屋先生の講演を通して、「自分は何ができるのか」「何をこれからすればいいのか」「私の使命は何のか」を考えさせられました。今の仕事を一生懸命に励み、世の中の役に立つ。人はそれぞれが役割を持ち、それを全うする。「生き方塾」に出席すると、ぐらついている自分の基軸が「天の時計」「宇宙時計」に合わせられます。また一カ月頑張ろう！

○…今回の輪読は感想を交えながらでしたから、とても深く考え、深く読むことができました。守屋先生の講義は、短期間で学園を立て直し、すごいと感じました。福島の子どもはノンビリし、学力も全国下位グループにいますが、私学ならではのきめ細かな指導で、自分のやりたいことを諦めないで実現できる生徒が増えていると聞き、とてもうれしいです。

●下村塾長から皆様へのお知らせ

守屋さんのご冥福をお祈り致します

２月５日（日）、「生き方塾」で応援団講義をされた時の守屋さんの状態は、非常に悪い状態で、聖路加病院からは、抗がん剤治療等々は全てやり尽くし、これ以上の治療をすることは不可能なので、緩和ケアの病棟に移ることを勧められていました。そんな中で、守屋さんは、ぜひというご本人の強い希望もあり、「生き方塾」の勉強会で上記の応援団講義をされたのですが、演台に立った守屋さんは、颯爽たる姿で、スーツをきちんと着て、背筋も伸び、用意していたイスに座らずに立ったまま１時間半、話をされました。スタートの時の声は少し弱々しかったのですが、話しているうちに、我々もビックリするような、堂々たるパワフルな声で、話がどんどん盛り上がっていきました。非常に良くとおった美しい声で、にこやかに笑顔でお話しをされ、まるで天からの声のようにすら私には聞こえました。強烈でインパクトのある、人の心を強く打つお話しでした。この日、実はご子息夫妻が守屋さんのお話を聞きに来られたのですが、講演が終わったあと、息子さんは私のところにやってきて、「びっくりしました。母にとってこの様なところで、今まで自分が信じて歩んできた道、やってきたことをお話しすることが、何よりの抗癌剤だということが良くわかりました」とおっしゃったのが印象的でした。恐らくご子息にとっても、普段のお母さまの状態とはまるで別人の状態を見るような驚きだったのだと思います。

その後、もちろん守屋さんは参加されませんでしたが、「夜遊び学」では、全ての塾生が、この守屋さんの大変感動的でエネルギッシュな話しに感動し、どう考えてもご病気とは思えないと、信じられない面持ちで、守屋様のお話でもちきりでした。守屋博子様は３月のザベリオ学園の卒業式に車椅子で東京から行かれ、きちんと理事長・学園長として話をし、務めを果たして、また車椅子で聖路加病院に戻られたというメールを私は受け取っています。

終了の坐禅をする守屋さん、下村塾長ら

病院にいる守屋さんは呼吸困難であり、息をするのも大変な肺の疾患に苦しんでいました。ですから、神業というか、超能力の様なパワーに、だただ驚くと同時に、人間というのは凄い力を持っているとものだと思ったものです。

その守屋様は残念ながら、４月４日に静かに安らかに、お亡くなりになりました。心強い仲間の一人、応援団でもあり塾生でもあった守屋さんを亡くしたことは、私にとっては非常に大きな喪失であり、しばらくはその喪失感に苛まされておりましたが、この講演の中にもあるように、神様に素晴らしい履歴書をご披露されたことと思います。

ご案内が届くと思いますが、来たる６月８日（木）郡山のホテルはまつで、午後１時から「追悼ミサ」が行われることになっています。お気持ちのある方は、どうぞご参列下さい。守屋様のご冥福を心からお祈り致します。

（下村満子）